

## 差異性としての<sup>ヌース</sup>知の再生

—知識技術化社会における生き方としてのレジャー—

犬塚潤一郎 [実践女子大学 生活科学部]

キーワード：アリストテレス、スコレー、ヌース、人工知能、特異性

現代社会におけるレジャーの意味を論じる際に、レジャー-leisureの語源をアリストテレスのスコレーσχολήに求め、観想(テオリア)θεωρίαを幸福(エウダイモニア)εὐδαιμονίαとする考え<sup>1</sup>は、ひとつの指針となるものである<sup>2</sup>。一方で今日、知識が経済の財および材となり、社会の仕組みが知識の連関によって再構造化・システム化されてゆく過程にあって、知的なことと人間の幸福との関係が結びつき難くなっている。人工知能による社会システムの自律的な制御の時代を迎えて、レジャーの意義を再考することが必要と考えられる。

### 1. 知識の技術化

コンピュータ業界でソフトウェアがハードウェア販売のためのサービス品であった時代は過去となり<sup>3</sup>、知識のマネジメントが産業のあらゆる面で重視される社会が生まれている。また、自然・社会環境のモニタリング(センサーの配備)が進むとともに生まれた、従来の情報処理システムでは処理・可視化ができない大規模なデータ集合(ビッグデータ)を意思決定に利用するための新たなシステムが開発・実用化されている。それと並行するように、大規模データを利用した機械学習、さらにニューラル・ネットワークを多層化した深層学習の実現により、人工知能の社会的応用の拡大が現実性をもって一般に語られるようになった。そして情報技術の発達は人間の脳の研究とも連携し、意識(主観的なもの)とは何かということの解明<sup>4</sup>が、形而上学とは無縁のところを進みえるとする立場に力を与えている。

### 2. 知識の経済と困り込み

はたして人工知能が人間に置き換わるのか、という議論はさておき、自動運転車が社会現実となった今日では、これまで従事してきた仕事が機械に奪われるという不安が、知識労働の領域にも広がることは避けられない。

機械がこれまで人間の手足の能力を飛躍的に延長してきたように、これからは人間の知的能力を別次元に高める、と期待される一方、その能力拡張は少数者だけのもので、そこから排除される多数者との間の(すでにある)格差は一層拡大することも想定される。

工業的産業による社会の近代化は、生産財・手段の専有と競争とを社会条件と認めることで発達してきたが、その経済の仕組みと制度は、交換・消費すれば自分の手元からなくなるという、物質が備える本来の希少性を基盤としたものである。一方新たに財・手段となった知識は、その本質において異なるものであるが、従来の経済体制の維持のために、本来とは異なる、交換・消費に適した属性を与えられているものとみなせる。

土地(自然)と労働力(人間)を誰かが専有することに存在論的な根拠はないにしても、限りあるものを効率的に使用し社会の経済的な成長には有効であるという、生産性向上の効用は認められよう。しかし一方、本来受け渡すことも使い尽くすこともできず、また共有することによって社会的価値を発展させることができる知識に、占有権を認めることが社会

的な生産性向上に結び付くものかどうかについては、本質的な反省が必要だろう。

少なくとも知識の経済に囲い込みの社会手段を適用し続けることは、社会の危険を今後とも劇的に増大させてゆくものと考えられる。

### 3. 知識のエコロジーと人間の特異性

知識産業化した社会では、知性を主要な尺度として人間の社会的価値が測られがちであり、かつその基準が画一的であることが構造的な問題を生んでいる。人間の知性は、各々の多様な経験と学習により、特異的に発達することがその本性であるが、現在の知識の経済システムの上では、従来の物質経済のシステムの原理である集約・排他の制度への準拠ゆえに、知性によって活躍できるのはごく少数者に限られ、大多数者にとっては、自己の尊厳への欲求は絶望的に果たされず、その不満と不安は一層高まるものとみられる。

人間の一人ひとりへの尊厳の根拠を知的なものに求める傾向の高まりと、環境との相互関係性を本質とする人間の知の固有な成長とは、本来一致するものであり、社会の発展はその特異性の尊重と促進にかかっている<sup>5</sup>といえるのではないだろうか。

### 4. 知とレジャー

アリストテレスは知を 5 つに分け<sup>6</sup>、レジャー (スコレー) は、知性・直観とも訳されるそのうちのひとつ、ヌース *vouç* の活動とされる。つまり知的活動とはいっても、今日的な意味での、技術(テクネー)や科学(エピステーメー)の活動(学習・研究)とは区別されている。

今日に続く技術批判の理論的基点となるのはハイデッガーのテクネー論であるが、ニーチェ-ハイデッガーの形而上学批判(反哲学、近代的理性 *ratio* 批判)は、近代社会の基礎にある主体-客体関係モデルを離れる、存在そのものの問いへの企てである。現代社会の危機を乗り越え、社会に新たな基礎づけをもたらす革新力を、社会を構成するそれぞれの人間のうちに育てるためには、ヌースの活動としてのレジャーの意義を再検討し、その社会的実現を構想することが必要なのではないか。

<sup>1</sup> 「知性の活動は一まさに観照的なるがゆえに一その真剣さにおいてまさっており、活動それ自身以外のいかなる目的をも追求せず、その固有の快樂を内蔵していると考えられ (この快樂がまたその活動を増進する)、かく、自足的・閑暇的・人間に可能なかぎり無疲労的・その他およそ至福なるひとに配されるあらゆる条件がこの活動に具備されているものなることが明らかなのであってみれば、当然の帰結として、人間の究極的な幸福とは、まさしくこの活動でなくてはならないであろう」アリストテレス『ニコマコス倫理学』、高田三郎訳、第 10 巻第 7 章

<sup>2</sup> 近年では、Kostas Kalimtzis の "Aristotle on *scholē* and *nous* as a way of life" (第 23 回 World Congress of Philosophy(2013)に発表)。K. Kalimtzis は現代ギリシアの哲学者であり、"An Inquiry into the Philosophical Concept of Scholē", Bloomsbury Academic (2016)を上梓。

<sup>3</sup> コンピュータ業界の巨人 IBM は 1992 年に約 50 億ドルの巨大赤字を計上するも、メインフレーム(大型コンピュータ)販売中心のビジネスモデルを IT ソリューション(問題解決)提供へと転換し再建。

<sup>4</sup> 例えば意識の統合情報理論 (Integrated information theory of consciousness、ジュリオ・トノーニ) は、主観的な意識経験を脳の物理性を逸脱することなく説明しようとする。

<sup>5</sup> 「集合的知性」としてピエール・レヴィは論じている。『ポストメディア人類学に向けて』(2015)

<sup>6</sup> 『ニコマコス倫理学』第 6 巻では、テクネー(技術) *τεχνη*、エピステーメー(学知) *επιστήμη*、ヌース(直観) *vouç*、プロネーシス *φρόνησις* (実践知)、ソピアー(知恵) *Σοφία* の区別が論じられる。